

## 若手研究者からの報告 (2)

# Tちゃんの変化の中に 観察者(部外者)としての私がいいた意味

金 允貞

韓国の保育園で、保育士として毎日子どもたちと過ごした私は、日本に来てから子どもたちの遊びを外から「観察する」機会を得ることができた。それまで私は、「観察」というものが人であれビデオなどの機械であれ、ただ見えるものをそのまま映すことだと思ってきた。しかし、一年以上観察を続けながら、観察というものが、ただ私が子どもを「見

る」ことだけではなくて、見ている私を子どもも見る、互いに「見る―見られる」関係にあること、それによって「新しく何かが生まれる」ことについて考えることができた。

通年の観察授業において、0幼稚園で一人の年中組の女の子(以下Tちゃんと呼ぶ)を約一年間観察してきた私は、Tちゃんの変化やTちゃんと保育者

との関係の変化、Tちゃんと子どもたちとの変化などを見る事ができた。そして、その変化の中でTちゃんが幼稚園の外部者から内部者になっていくのを見た。また、その過程で、観察のために外部から幼稚園に入った私に働きかけてくるTちゃんの姿にはあるが、Tちゃんにとっては意味ある存在だったのではないかと思うようになった。

### 《記録》

二〇〇五年五月二十四日

積極的に話しかけてくるTちゃん

Aちゃんと鶏小屋で遊んできたTちゃんは先生におんぶしたあと、降りてクラスに入り、ビニール袋に水を入れて持ってきた。ほかの観察者に結んでもらおうとしたが、できなくて私の所に持ってきて「結んで」と言い、結んであげると、「そうそう」と

言った。そのビニール袋をほっぺにつけたり写真屋のおじさん（カメラマン）に見せたりしながら庭をうろろろし、急に私の所に来て肩に登り、「立ってごらん」と言った。私が立つと、「歩いてごらん、あそこまで」と言い、私が「あそこで降りましょう」と言うと、降りてから花壇を片づけている年長児を見たり、ウサギを見たりして庭をうろろろする。それから赤い実を持ってきて「これなに？」と私に聞いて、私が「そうね。何かな？」と言うと、年長組の先生に聞いてから私の所に戻ってきて、「これ名前が蛇だって、食べちゃだめだって」と言いながら私に「あげる」と言った。

観察を始めたころは、Tちゃんは明るくて自分の意見や要求をちゃんと話していたので、友達の間でも活発に遊ぶ人ではないかと思った。しかし、友達とあまりかかわりをもととせず、また、一緒に遊

んでいても自分からその場を離れたり、友達からの言葉かけにも返事をしなかつたりして、遊びが続かない場面が多く見られた。その反面、先生や周りにいる大人には自分からすぐ話しかけたりいたずらをしたりした。特に、私が毎週続けてTちゃんを見にきていることを気にしているようで、Tちゃんを見ていると必ず私の所に来て、何かを話しかけた。

私は、Tちゃんが私に関心を見せる様子が、ほかの子どもたちが時々示す関心とは違うことを感じた。私に対するTちゃんのかかわり方は、ただの観察者として私を見るのではなく、私に、より深い関係を求めている気がした。どうしてTちゃんはほかの子どもたちと違って、私にはつきりした関心を見せるのか。Tちゃんは私とのかかわりを通して何を



求めようとしたのか。Tちゃんは、保育者に、だつこやおんぶしてもらいたがつたり、保育者のそばにいたりしようとすることが多い。ずっと自分の所にいられない保育者と違って、ずっとTちゃんだけを見ている私に自分のことを手伝うように話すのは、当たり前のことだったかもしれない。

#### 《記録》

九月二十七日

Tちゃんを観察することのつらさを感じる

園庭に出たTちゃんは一人で砂場に入ったあと、山への坂道にY先生がいるのを見て、先生の方に向かっていった。Y先生と一緒に山に登ろうとしたTちゃんは、一人で降りてきて、また少し山に登ったり降りたりを繰り返した。その後、花壇のはじっこに隠れて遠くからTちゃんを見ている私を見始めた。しばらくそのまま私を見ていたTちゃんは、花

壇のはじつこの方から徐々に私の前に近づいてきて座り、砂を集めて少しずつ落としてから自分の頭にも砂を何回も落とした。

二学期最初の観察日、私は夏休みの間Tちゃんがどう変わったのかを考えながら幼稚園に入ったが、一学期とあまり変わりなく、工作をしながら先生にくつつこうとしたり、話しかけたり、一人で園庭に出てうろうろしたりするTちゃんの姿を見た。私がTちゃんを見ていることをTちゃんが気にしていると考えて、この日は、Tちゃんがかかわってこないように、なるべく遠い所からTちゃんを見たり、Tちゃんを見ないふりをしたりして観察を続けた。

その後、園庭に出たTちゃんが自分の髪に砂を落とした時には、どうしたらよいかわからなくなり、Tちゃんがすぐかわいそうに思われた。Tちゃんを見ている私の方に近づいて座って砂を頭に落とす

ことを見て、その行為がまるで『どうして自分を避けてばかりいるのか』と私に話しかけているような気がして、とてもつらくなった。そしてTちゃんを観察するのがTちゃんにとつては、本当はよくないことではないか、やめたほうがよいのではないかと思った。

### 《記録》

十一月一日

新しい関係をつくり出そうとするTちゃん

1. 紙箱で何かを作っていたTちゃんは、H先生に「先生来て」と言い、H先生は「はい、今行くよ」と返事をしてTちゃんの隣にきた。Tちゃんが「早く来てやって、テープはって」と言うと、H先生は「どこにつけるの?」と聞く。Tちゃんは「階段についたら」と言う。

H先生はTちゃんの隣に座ってTちゃんのことを

作りながら、ほかの子どもたちと話をする間、Tちゃんはほかの子たちの遊びや隣で絵を描いている男の子の絵をじっと見て、その子に何か話した。その時、H先生がほかの子に引つ張られ園庭に行ってしまった。それに気づいたTちゃんは、クラスの中を見回しながら、「先生、先生、H先生、〇〇（姓）

H先生」と大きな声で呼び、いすの上に立って何回か「H先生」と叫んだ。いすから降りたあともTちゃんは小さな声で「〇〇H先生」とずっと呼び続けながら、隣の男の子の絵を見たり、ほかの友達が遊んでいるのを見たりした。

2. Oくんが園庭からカキを拾ってくる。H先生が皮をむいてあげると、Tちゃんは四、五人の子どもたちと一緒にカキを食べていた。

H先生が「もうすぐファイアランドに行くよ。少し片づけてから行こうか」と言った時、Tちゃんは急に私に飛びついてきて笑いながら「名前なんてい

うの？」と聞いた。私はびっくりして「うん、あとで教える」と答えると、Tちゃんは「なんで」と言ってH先生の隣に行って、歌いながらクレヨンを片づける。

H先生がTちゃんのそばから離れた時には、TちゃんがすぐH先生を探しに行くのではないかと思ったが、TちゃんはただH先生の名前をずっと呼び続けた。名前を呼びながら、ほかの子の絵や遊びを見るTちゃんの姿は、それまでのTちゃんとは違う感じがした。TちゃんがH先生の名前をずっと呼んでいたのは、先生に自分の隣にいてほしいという気持ちがあったのだろうが、それよりは、「H先生は今自分の隣にはいないけど、どこにいても先生は変わらなく自分を考えているんだ、だから大丈夫」と、自分で自分を納得させ、Tちゃん自身の中で、先生の存在を確かめているように思われた。

カキを食べたあと、急に私に飛びついてきて名前を聞いた時は当惑したが、Tちゃんの声が明るく、今まで私に話しかけた時とは全然違う感じがした。ところで、Tちゃんはどうして私の名前を聞いたのだろうか。普通名前を聞くのは最初の出会いの時である。Tちゃんは今まで私とTちゃんの間であったこととは違う新しい関係を始めようとしたのではないだろうか。

## 全体的考察

### Tちゃんの変化と

#### 観察者としての私がいたことの意味

十一月の観察で、Tちゃんは先生が自分のそばを離れても先生についていかず、その場にいながら友達と話を続ける場面が見られた。一学期には先生の所に大勢の子どもが来ると、後ろに下がって先生から離れることがよくあったが、十一月の観察から

は、Tちゃんの隣に大勢の子どもが来ても先生から離れなかったり、先生と手をつなごうとする子どもたちとの間でTちゃんも積極的に先生の手を引っ張ったりすることが見られた。こういうTちゃんの変化はTちゃん自身の成長、友達と一緒に過ごす幼稚園の生活に慣れてきたこと、周りの子どもたちの成長や、それによる保育者の変化などが含まれてなされたことだと思われる。そして、そういう変化を通してTちゃんはだんだん幼稚園の中に入ることができただろう。

さて、そういうTちゃんの変化の中で私はどんな意味をもった存在であっただろうか。

約一年間、Tちゃんは私の名前も知らないままずっとかかわってきた。それは私が幼稚園の中の人ではなく外部から来た観察者だったから可能だったのだろう。名前を知らないまま関係が続いていることはあいまいな状態になる。私がそういうあいまい

な人だったにもかかわらずTちゃんがずっと働きかけてかわりをもととしたのはなぜだろう。それは、Tちゃん自身が幼稚園の中で、まだあいまいな状態でいたからではないだろうか。幼稚園の内部にいなながらも、その場で自分のありのままで過ごせる確かな内部者になれなかったTちゃんは、担任の保育者や幼稚園内部の保育者に強くかわりを求めることによって内部者になりたいことを表したのではないだろうか。その反面、外部から来た私には、外部者であることに同情し心地よさを感じたのではないだろうか。

Tちゃんが私の所に来なくなったのは、私に名前を聞いたあとからである。Tちゃんにとって名前はどんな意味をもっているのだろう。H先生の後ろを追わないで先生の名前を呼び続けたことと、その後、私に名前を聞いたこととは何か関係があるだろうか。

名前はその人の存在を明確にしてくれるものである。そう考えると、TちゃんにはH先生の存在が明確になっていることがわかる。そして、今まで名前も知らなかったあいまいな状態であった私の存在も明確にしたかったのかもしれない。Tちゃんが私の存在を明確にしたくなったのはTちゃん自身の存在が明確になつてきたからではないだろうか。そういうTちゃんの問いかけに私は「あとで教える」と私の存在をあいまいなまま残しておいた。

その後、Tちゃんは私を見ても何のかかわりもとうとしなくなり、私はTちゃんに意味のない人のようになつたが、そのことは、よりTちゃんには意味があると思ふ。もうTちゃんには私のようなあいまいな存在は必要ではない。だからこそ私は十分Tちゃんに意味のある存在だったのではないだろうか。

(お茶の水女子大学大学院)

## 【寸評】

Tちゃんは三年保育の幼稚園に四歳児から入園した子どもでした。新入園児がよそから来た観察者やお客様の所に寄ってくることは珍しいことではありません。新しく入ってきた子どもたちは幼稚園で起きている遊びや出来事を周辺からよく見ており、外の人たちにも敏感です。周辺には多くの学びの可能性があり、コミュニティにおけるアイデンティティー形成（所属感を含む）に重要な意味があることを指摘したのは、文化人類学者のレイブとウエンガーでした（Lave & Wenger, 1991/1993）。

一方、外から来た観察者は、保育の妨げにならぬよう子どもたちの様子をそっと見ていま

す。この観察者にTちゃんが助けてくれる大人として積極的にかかわったのはなぜでしょう。それはずっと自分のことを見ていてくれる観察者のまなざしが、Tちゃんへの「かかわり」そのものになっていたからではないでしょうか。保育者のように声をかけたりするわけではないけれども、見ている観察者もまた生きた存在者として保育の場に在ることに気づかされます。そして、名も知らない観察者にかかわりを求めていたTちゃんが、ある時、観察者の名前を確かめ、その後、観察者の所にはもう来なくなっていく姿に、しっかりとここの幼稚園の人となっていく成長のプロセスがよく表れています。

（刑部育子記）